

人類の第二物質科学文明時代が始まり、その文明創造促進のための方便として作り出された生存競争社会の中に現われて来ました人々の罪穢が、人類全体の生存の危機をもたらす事となった現在、危機回避の唯一の手段である大祓の方法の開示を披露する祝詞の第四章に入ります。

大祓といわれますから、罪穢を祓うためには、今日地鎮祭や開所式などで見られますように、神前に供えてある幣（ぬさ）を持ち、神主さんが参集した人々の前に立ち、その幣を左右に振ってお浄めをする事と思われるかもしれませんが。または人々の心の中の罪穢を調べ、良い内容はそのままに、悪い内容は悔い改めさせて罪穢を無くすというキリスト教の懺悔の如き方法と思われる方もいらっしゃるかも知れません。罪穢の祓いといえば以上のような事が常識であると今日では思われています。けれど日本の布斗麻邇の原理に則った罪穢の祓いは今日の常識とは全く違ったものなのであります。現在、私達の眼前に展開している人類社会存続の危機を転換して、第一、第二と続いた人類文明を更に飛躍させて人類の第三文明時代の創造を実現させる唯一の方法である大祓でありますから、これよりその大祓の内容を出来る限り詳細に説明して参りたいと思います。先ずはその大祓の修祓の方法を字句を追って説明し、次にその精神的内容の説明に入ります。

か い 斯く出でば

弱肉強食の生存競争の世の中が進み、その果にこの地球上が人間の住むに耐えない程生命の危険が増大した時には、の意であります。

あまつ みやごと も 天津宮事以ちて

天津はこの場合政治を司る朝廷の、の意でありましょう。宮事の宮とは靈屋の意で、言靈の家即ち五十音言靈図を言います。天津宮事以ちて、の全部で「人類文明を創造する政庁である朝廷に於いては、政治の根本原理である五十音言靈の原理を操作・運用することによって」の意となります。

なかとみ 大中臣

大祓の行事の最高責任者は政治の中心におられる天皇です。大祓の行事の対象となる人は宮中のお役人であり、また国民・民衆でありま

す。大中臣とは天皇と役人・民衆の間であって、天皇の司る大祓の儀の代行者として取り仕切る人、今の行政府の総理大臣に当る役の事でありす。

あまつ かなぎ

天津金木を、本打切り、未打断ちて、

この文章の解釈が従来は最も困難であった箇処であります。天津金木の内容が不明であったためであります。言霊学が復活して天津金木が言霊五十音図の事であることが判明し、この文章の意味も明らかになりました。天津金木とは音図に向って最右端の母音の縦の並びがアイウエオとなり、横の十言霊がア・カサタナハマヤラ・ワと並ぶ五十音図の事でありす。現代の学童が学校で教わる五十音図のことであり、言霊学によれば人間の言霊ウの次元から発現する人間性能である五官感覚に基づく欲望現象を人間に与えられた五性能の一番中心に置いた時の人間の心の構造を五十音の言霊で表わした音図のことでありす。この天津金木音図を「本打切り、未打断ちて」とありす。音図に向って右の母音から物事は出発し、八つの現象子音の実相の変化を経過して、最後に向って左の半母音に至ってその物事は終結します。でありますから、「天津金木を、本打切り」といえば音図の本である五母音の縦の並びを音図全体から切り離してしまうという意味であります。「未打断ちて」とは天津金木音図の半母音の縦の並びを切り離してしまう事となります。

ちくら おきざ

千座の置座に置き足らはして

ち くら

千座とは道の倉の意です。生命の道理の構造と言った意味であります。「置き足らして」とは、生命の道理に合うようにすべてを置いて見て、という事、即ち「天津金木音図で示される人間の欲望を中心とした五十音図の中で、母音と半母音の列を切り離し、その母音と半母音の列と、中間に展開しているカサタナハマヤラの八行とを、生命の道理を示す構造の上当てはめて置いて見て」という事でありす。この作業が実際にはどの様なものか、は後程説明いたします。

あまつ すがそ

天津菅麻を、本刈断ち、未刈切りて

天津菅麻とは天津菅麻音図の事で、人が生まれたばかりの天与の心の構造を表わす五十音言霊図の事でありす。菅麻とは「すがすがし

「^もい衣」の意で、生まれたばかりの赤ちゃんの心の衣の事です。「本刈断ち、本刈切りて」とは金木の時と同様に天津菅麻音図の母音、半母音の列を音図から切り離してしまう事でありませう。

八針^{やはり とりつ}に取辟きて

天津菅麻音図の両端の母音・半母音の列を音図から切り離し、残った縦の八つの現象音の列を一列ごとに裂いてばらばらにしてしまっ、という事でありませう。

天津祝詞の太祝詞事^{あまつのりと ふとのりとこと の}を宜れ。

天津太祝詞音図に示されている如く、即ち母音の縦の列アイエオウ、音図の一番上の横の列アタカマハラナヤサワの精神構造が示す行法によって天津金木、天津菅麻の精神を宜りなおしてみよ、というわけでありませう。

以上が三千年にわたる生存競争時代を通して積もりに積もった人類のコンプレックスである罪穢を修祓する大祓祝詞の謂う方法でありませう。この大祓祝詞が天津太祝詞子天皇によって制定されて以来、約四千年近い間、宮中に於いて六月と十二月の末に年に二回、天皇の御前に宮中に奉仕するすべての役職にある者を集め、大中臣がこの祝詞を称え、天下に向って宣言して今日に至ったのでありませうが、制定された当時は兎も角、生存競争が熾烈となったここ二・三千年間に於いては祝詞を称える行事は続いていましたが、実際に大祓の修祓が実行された事は一度としてなかったのでありませう。宣言はあっても実行なし、即ち「今にやるぞ、時が来たならば大祓が行われるぞ」と年に二回、宮中に於いて宣言されながら唯の一度として実行されなかったのがこの大祓祝詞の罪穢の修祓なのでありませう。

それは何故か、大祓祝詞の罪穢の祓いの方法を真に必要とする人類文明上の「時」が来なかったためでありませう。と共に日本人の大先祖でありませう皇祖皇宗の歴史創造の経綸上、この大祓の実行を必要とする迄の期間、大祓の真の意味を明らかにする根本原理であるアイエオウ五十音言霊の原理が宮中の天皇を初め、日本人・世界人類の意識の表面から全く忘却されてしまったからでもありませう。この期間、人々

は大祓祝詞の意味を知る事なく過ぎたのであります。そして大祓の精神内容を呪示・表徴する神官による鹿爪らしい演戯・狂言様の仕草の儀式が行われて来ました。それは実際に大祓の実行を必要とする時が来るまで、大祓の精神内容を後世に伝える為の手段・演戯に過ぎないものであります。

聞く所によりますと、過去千年にわたり皇室・宮中の罪穢の修祓を委任されて来た阿倍の清明に始まる土御門神道の大祓の行事の中には、祝詞の「八針に取辟きて」の所で種々の色に染め分けられた布を八つに「ピーッ」と音を立てて裂く仕事が行われているそうです。その様な仕草によって大祓の行法の真の意味を呪示・表徴したものと考えられます。けれどそれは時が来たならば大祓の真法の精神内容を後世に伝える手段なのであって、布を八針に引き裂いたからと言って罪穢が消え失せるものでない事は勿論の事でありましょう。

二十一世紀を迎え人類が第一精神文明、第二物質科学文明に次ぐ第三の文明を創造すべき時が来ました。第一精神文明の基礎原理であったアイエオウの五十音言霊布斗麻邇が昔あったそのままの姿で復活しました。その事によって大祓祝詞の精神内容も手にとる如く分かって来ました。「来るぞ、来るぞ」と四千年近い間、予言されてきた大祓祝詞の全人類の罪穢を祓う大いなる力を実行に移す時となったのであります。言霊原理に則り、その行法の内容を説明して参ります。

西暦でいう二十世紀、二千年の間に積み積もった人類の罪穢を祓う方法の開示であり、大祓祝詞の最も重要な箇処でありますから、分かり易く一行か二行の文章で力強く表現出来ればこれに越した事はありません。現にこの手段開示の祝詞の文章は「斯く出でば……」から「天津祝詞の太祝詞事を宜れ」と美文でもって簡単に説明しています。しかし、この美文を現代人が容易に理解する為の説明はそう簡単には参りません。その一字一句の説明の段となりますと、人間の精神の精密な部分々々の内容を網羅した膨大な組織にわたっているものだからであります。そうでありますからご面倒でも少々難解で長い説明にお付き合い願う事となります。

先ず大祓の対象となる天津金木と天津菅麻の説明から始めます。図

を御参照下さい。天津金木音図は先にお話しましたように、人間の持つ五つの性能の中の言霊ウの次元より発現する五官感覚に基づく欲望性能を五つの性能の中心に置いた精神構造を表わした五十音言霊図です。即ち独走を始めた須佐之男命の音図なのです。人類が第二の物質科学文明創造の時代に突入して、外国では三千年前、日本では二千年前、精神文明の中心原理であった言霊布斗麻邇を政治の面に適用することを停止してしまった事で、時を経るに従い、弱肉強食の生存競争が熾烈となって来ました。人間の欲望性能が他の人間性能すべてを欲望達成の手段としてしまい、その世相は現代まで続いています。この二・三千年間は言霊ウの性能が他の人間性能との協調を捨て、独走した世間相を現出させました。「勝てば官軍」「力の強い者勝ち」の世の中となりました。天津金木は今日までの社会を表徴する最も適切な音図という事が出来ます。古文書に「天皇モーゼに天津金木を教える」とありますように、金木音図の言葉の横の並び「カサタナハマヤラ」は、その自覚に立つものは「百戦闘うも危うからず」(孫子)とある如く、絶対無敵の戦法の所有者となります。旧約聖書に、エホバ神の「我は戦いの神、嫉みの神、仇を報ずる神」の宣言が見られるのも、ユダヤ民族が天津金木に依るカバラの原理の所持者なるが故であります。この様に天津金木という音図は一にも二にも戦いの音図であり、この音図だけを新入学の小学生に教える現代日本はまだ欲望と戦いの戦場としての日本と言う事が出来ます。

次に天津菅麻音図について説明しましょう。^{すがそ}菅麻とはすがすがしい心の衣の意味で、先に書きました如く生まれたばかりの赤ちゃんが天与に持っている心の構造であり、まだ人工的なものが混じっていない大自然の心という事が出来ます。その五母音は天である言霊アを上、地である言霊イを下に、その間にやがて人為の性能が加わるであろうと言霊オ・ウ・エが中に入る事となり、縦にアオウエイが並ぶ事は御理解頂けることと思います。菅麻音図を図でご覧下さい。母音イと半母音ヰとの間にチキシヒイミリニの八つの父韻が並べてあります。言霊イ・ヰは人間の創造意志であり、八つの父韻はその意志の動きの振動ともいべきもので、その父韻が母音アオウエの四次元の宇宙実在

天津金木

ワ	ラ	ヤマ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ								イ
ウ								ウ
エ								エ
ヲ								オ

天津菅麻

ワ								ア
ヲ								オ
ウ								ウ
エ								エ
ヰ	ニ	リ	ミ	イ	ヒ	シ	キ	チ

天津太祝詞

ワ	ラ	ヤマ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ								イ
エ								エ
ヲ								オ
ウ								ウ

に働きかけて現象である子音を生みます。ところが生まれたばかりの赤ちゃんは創造意志を持ってはいますが、まだその創造活動をほとんど発動はしていません。人為的活動をしていません。そこでこの図に書き表した父韻の並びは父韻の作用の四音チキシヒを右に、反作用のイミリニを左に並べました。実は与えられてはいますが、活動していないのですから、その並びはどう書いても構わない事になります。全く菅麻音図とは大自然の中の人という生物の心の構造図なのです。人間のすべての営みの現象はこの菅麻音図にある五十音言霊によって構成されますから、菅麻音図とは人間生命の一切を創造する親神である伊耶那岐の神の音図と呼ばれます。それは人間の営みの善悪、美醜、真偽、得失がそこから生まれて来ますが、この音図はこれから全く超越した次元であります。

以上天津金木、天津菅麻の両音図について説明しました。次に天津金木を取上げて「千座の置座に置き足らはして」があり、天津菅麻の下に「八針に取辟きて」が書かれておりますが、これは大祓祝詞を最終的にこの文章に修飾したと伝えられます柿本人麻呂が祝詞の文章を称え易い美文調にする為に、詩的表現を用いましたので、その正確な内容から言えば「天津金木を、本打切り、末打断ちて、天津菅麻を、本刈断ち、末刈切りて、千座の置座に置き足らはして、八針に取辟きて、天津祝詞の太祝詞事を宜れ。」となるのであります。「千座の……」と「八針の……」の操作が金木と菅麻の双方の音図に掛かるのでなければ、大祓の修祓の意味が通らない事に依ります。

さて、これより大祓の精神内容に立入ることといたしますが、先ず気が付きます事は、方便として現出させた生存競争の時代の特徴である「我良し」の心の根本となる天津金木音図が修祓の対象となる事は容易に理解できる事ではありますが、人間の心の営みのすべての根源法則である伊耶那岐の神の音図である天津菅麻が修祓の対象となる事は中々理解し難い事であります。大祓祝詞の文章だけからでは理解不可能に近い事です。

大祓祝詞全体の内容が古事記神代の巻によって呪示された言霊布斗麻邇の原理の復活によって初めて解明されました如く、大祓の天津菅

麻の修祓の理由も、古事記の「身禊」の章における「禊祓」の手順の克明な開示に照合する時、初めて明らかに理解されるのであります。と同時に古事記の言霊原理による「禊祓」によって大祓の修祓が明白に浮かび上がって参ります。(「古事記と言霊」の「身禊」その二参照)

古事記神代の巻の「身禊」の章は、言霊百神の中の七十四番目の伊耶那岐の大神より百番目の須佐男命までの二十七の神名によって、大祓の修祓の方法を詳細に述べています。今、大祓祝詞が述べる天津金木、天津菅麻を天津太祝詞に宜り直す方法は、古事記の禊祓では「大禍津日神、八十禍津日神より神直日神、大直日神、伊豆能売」にかけての手順で心行くまで明白に説明されています。その古事記が示す内容によって大祓の修祓の意味を明らかにしましょう。

大祓も古事記の禊祓も、世の中に現われて来る種々の罪穢を、国家や朝廷が定めた規則に照らし合わせて、その善悪、美醜、真偽、得失等を調べ、それによって裁判の如く判定を下すという事ではありません。では調べないのか、と申しますとそうではありません。綿密に調べ、社会に現出して来る一切の物事の実相を明らかにします。ただ違いますのは、調べた事をそのまま論^{あげつら}うのではなく、その物事が国家・社会の歴史の流れの中であってどの様な時処位を持っているのか、その物事を社会の文化・文明の中に吸収する時、どの様な変化をするか、を見極め、更に物事の責任者にどう説明し、命令すれば進んで納得し、生甲斐を感じてくれる事が出来るか、が勘案され、その結論が当事者に至上命令として発表されるのです。如何なる善悪も、美醜も、真偽も、得失も、一切を捨てることなく、国家・社会・人類の文明創造の材料として摂取され、善悪・美醜……を超えた彼方に新しい歴史生命として甦えらせるのです。コンプレックスである罪穢は歴史創造の中に吸収され、新しい生命となって生まれ変わるのです。これが大祓の修祓の方法であり、古事記禊祓の手順であります。

この時、大祓祝詞の謂う天津金木は、その「我良し」の生存競争の自我意識は新しい産業・経済・学問の社会創造の流れに汲み上げられる事によって自我は消失し、その才能が社会建設の奉仕精神として生まれ変わるでしょう。では言霊が存在する言霊イの次元の構造を示す

天津菅麻音図はどのようなのでしょうか。言霊原理はこの時、大祓実行のための基本原理であることに違いはありません。けれど基本原理であるが故に、行法の全面に主張される事はなくなります。縁の下の力持ちの役に甘んじる事となります。古事記禊祓に於いて創造意志である言霊イの言霊原理の大禍津日神として規制され、その隠れた役目に甘んじる事によって大直日(言霊ウ) 神直日(言霊オ) 伊豆能売(言霊工)の絶対真理への道が切り拓かれることとなります。(以上の自我意識の葛藤の消失による人類文化の創造の精神内容は大祓の次の章で詳説されます。)

この処の消息をもう少し説明します。言霊布斗麻邇の原理が復活し、この原理によって禊祓をしようとする時、この言霊原理を鏡として社会の種々の物事を新しい歴史創造の材料として吸収しようとする時、ともすると「言霊原理に拠れば、この様にするのは当然だ」と、原理の説明とそれによる説得に終始し勝ちとなります。これは言霊原理の存在を認めた者には当然のように思われますが、古事記禊祓ははっきりとこのやり方を否定します。言霊原理を鏡としないではありません。鏡とした上で、更にこれを禊祓の方法として腹の中に呑み込み、その上で物事の現在から新しい歴史創造の役に立つ生命を吹き込む言葉を与えて生かして行くのです。言霊原理を振りかざす事は「大禍津日」の「大禍」に当ります。その大禍を心の中に秘めて、新生の言葉を与えて「津日」即ち日である言葉の示す真理の結果(日)に渡す(津)言葉(至上命令)を発動すること、これが古事記の禊祓であり、大祓の天津太祝詞事、即ちタカマハラナヤサの天皇(スメラミコト)の御稜威みいなのです。

そこで「斯く出では……」から「天津祝詞の太祝詞事を宜れ」までのこの章の全訳を書いてみましょう。

人類社会の罪穢が積もりに積もって、社会崩壊の危機が迫った時には、政治の庁である日本の朝廷に於いて、天皇の政治の代行者である大中臣は、生存競争社会の基本精神構造である天津金木音図の中から、主体を表わす「我良し」の觀念の母音の列アイウエオを切り離し、利害・得失のみを追及する目的としてのワヅウエヲ半母音を切り離して、

母音と半母音の間に挟まれた、物事が初めから目的に行き着くまでの現象の経過を表わす八つの子音の並びを列毎に切り裂いて、歴史創造の自由な発想の原点に帰り、人間生命の道理に基づく天津太祝詞のタカマハラナヤサの襖袂の手順に改めて直すこと、また時代転換のために甦った来た天津菅麻である言霊原理を歴史創造の基本法則に据えながらも、縁の下の力持ちの役目に留め、大禍津日より伊豆能売への発想の転換を成就されて、そこから湧いて来るタカマハラナヤサの御稜威の光の下に、社会の一切の物事を人類文明創造の材料として摂取し、これに新しい生命を与えて歴史を推進させ、その創造の光の中に罪穢が必然的に消滅して行くよう務めなさい。これが天津祝詞の太祝詞事であります。

以上、四千年程前、人類歴史の将来に備えて制定されました大祓祝詞の罪穢の修袂について説明いたしました。四千年の昔に、現代の人類が迎えるであろう社会崩壊の危機を予言し、更に弱肉強食の天津金木思想を人間生命本具の平和の社会に転換し、その時に復活して来る言霊布斗麻邇の原理の運用に誤りなきよう大祓祝詞と古事記による言霊の原理を遺して下さった私達日本人の先祖の深謀と遠慮に心より感謝の念を禁じ得ません。

外国に於いては三千年前、日本では二千年前、言霊の原理の世の中の政治への適用が停止されました。神話の謂う言霊原理とその活用である天照大神の岩戸隠れとなりました。太陽である天照大神(言霊イ・エ)は隠れ、日の光の反射光である月読命(ア・オ)と独走の須佐之男命(ウ・オ)の二つのみの世界となりました。日である天照大神が隠れ、その代役を果たしたのは月の光の月読命の宗教・哲学・芸術活動でありました。月読命と須佐之男命はこの三千年間、それぞれの分野に拠って産業発展と環境問題、戦争と平和等の社会問題で事毎に対立して来ました。ところが、その対立の構図は、生存競争時代の精神構造を言霊を以って表わす天津金木音図それ自体に見る事が出来ます。(図参照)

金木音図を縦横で半分ずつに仕切り、その向って右の上の列を見ると、アカサタナとなり、これは「^あ明^{さと}かき^た悟^なりの田を成せ」と読めます。

これは正しく宗教の心を表わします。即ち大自然の心である菅麻音図に帰ろうとする心です。また、その中心に言霊スが入ります。音図の向って右半分を主基田と呼びます。

音図の向って左半分の上段はハマヤラワとなり、これは「端をまとめて八つに並べて和せ」と読めます。これは正しく物質科学探究の心です。音の左半分の真中に言霊ユがはいります。そこでこの音図の半分を悠紀田と呼びます。

宮中に於いては毎年新嘗祭に、また、天皇一代に一度の即位の時の大嘗祭に主基・悠紀の田を定め、そこから獲れる新米の稲穂を天皇自ら主基田の月読命と悠紀田の須佐男命に言霊を表わす稲穂（イの名の穂）を献じて、ここ三千年の月読と須佐男の対立の構図が実は皇祖皇宗の物質科学探究のための言霊学による経綸なのである事を告げ、「物質科学文明成就の暁には天皇自ら言霊布斗麻邇の原理を以って、三千年の月読・須佐男の対立に終止符を打ち、第三の文明時代建設を親裁するぞ」との予告なのです。この行事も大祓祝詞と同様、物質科学文明時代の終わりに当り、人類の危機を転換する方法の予告であり、同時にその実行法の呪示と言う事が出来ます。

天津金木

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ		㊦					㊧		イ
ウ									ウ
エ									エ
ヲ									オ